

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」から シェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その五

草 薙 太 郎

1. はじめに

文部科学省科学研究費補助金やドル減らし予算などを使い、富山大学人文学部の研究室に1990年頃から収集し、随時オンラインのデータベース化に取り組んでいる米国シェイクスピア研究学位論文のコレクションから、米国の文化的特徴が読み取れ、まずアメリカニズムの一般的特徴を論じた¹。その成果をもとに、シェイクスピア=ベーコン説、「テロ対策」との関連を検証する、一連の論文発表を計画・実行した。そのことを以下にまとめて提示したい。

データベースの分類項目と対応論文は以下の通りである。分類項目を列挙し、対応する発表論文名を注記する。その後で、各項目について詳しい議論を行いたい。

(1) 移民の国として様々な価値観が混ざり合いボーダーレス化する特徴

- (a) 心理学、臨床心理学などと関連するもの²
- (b) 枠にとらわれない米国流自由研究³
- (c) 映画に関連するもの⁴
- (d) 多民族国家、植民地政策などに関わるもの⁵

1 『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』が表す米国の特徴 その一 富山大学人文学部紀要第40号（2004）。『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』が表す米国の特徴 その二 富山大学人文学部紀要第42号（2005）。

2 『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア=ベーコン説を検証する その一 富山大学人文学部紀要第44号（2006）。『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その四 富山大学人文学部紀要第49号（2008）。

3 Ibid.

4 『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア=ベーコン説を検証する その二 富山大学人文学部紀要第45号（2006）。『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その五 富山大学人文学部紀要第49号（2008）。

5 Ibid.

- (e) 語学的考察に近いもの⁶
 - (f) 実際に演じることからの論考⁷
 - (g) ホモセクシュアルに関わるもの⁸
- (2) そうはいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴
- (a) 主として英国と関連するもの⁹
 - (b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの¹⁰
 - (c) 西欧文化全体と関わるもの¹¹
- (3) 競争社会として社会のヒエラルキーを駆け上がりマイノリティーがメジャーになろうとする（フェミニズムが典型）圧力のある特徴
- (a) フェミニズムに関するもの¹²
 - (b) 社会学的な考察をするもの¹³
 - (c) 政治に関わるもの¹⁴

なお、一連の論考は、随時更新されたデータの、発表時での最新データに基いている。

(c) 映画に関連するもの

映画に関する米国のシェイクスピア研究学位論文から読み取れる米国の特徴は、「アメリカ的英雄感覚」を描くということに集約できる。それは英雄対アンチ・ヒーローの対立で善悪の振幅が激しい特徴がある。ヘブライ・ヘレニズム文化を引きずるために、ギリシャ神話から英

6 『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝バーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その一 富山大学人文学部紀要第47号（2007）。

7 Ibid.

8 Ibid.

9 『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝バーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その二 富山大学人文学部紀要第48号（2008）。

10 Ibid.

11 Ibid.

12 『データベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝バーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る その三 富山大学人文学部紀要第49号（2008）。

13 Ibid.

14 Ibid.

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

雄を、聖書から悲劇の悲惨さを継承し、振幅の激しさは映画を取り巻く様々なものに及ぶ。一方、映画を「国技」とするため、各国の映画には敏感で、日本映画の特質もよくとらえている。「道」と「家」が結び付く明治以来の技術練磨志向があり、英雄を歓迎せず、「道」を究めた宗匠が尊重される感覚を、敏感に読み取っている。

2001.9.11のテロが起き、ハイジャックされた旅客機がニューヨークの世界貿易センタービルに突っ込んで、その映像が繰り返しテレビで放映されたとき、どこか事件そのものがハリウッド映画のようだと思った人は多いのではなかろうか。特に旅客機が突っ込んだ後、逃げる人々の背景でビルが崩れる場面は、似た場面をハリウッド映画で観たような感じがしてならなかった。

その後犯行がイスラム過激派アルカイダの仕業とされ、アフガニスタンについてイラクをアメリカが攻撃し、その命令を出したブッシュ大統領の支持基盤がキリスト教原理主義を信じる人々であったことが注目され、さらにイスラエルのレバノン攻撃などが起き、十字軍や聖書時代に世界が逆行したかの印象があって、あの事件がハリウッド映画に似た印象があったことを忘れてしまっていた。

しかし、その印象は消えない。犯人が実際にイスラム過激派でなくてもあの事件が起こる可能性があったことを以下に述べたい。つまり、以上を先述の「ヘブライ・ヘレニズム文化を引きずるために、ギリシャ神話から英雄を、聖書から悲劇の悲惨さを継承し、振幅の激しさは映画を取り巻く様々なものに及ぶ」証拠とした上で、それが現実のアメリカ社会でどう機能しているかを見てゆきたい。

分類項目「(b) 社会学的な考察をするもの」で以下の記述をしたことがある。

アメリカ社会とは、あらゆる人や国家について「選択の主体性」を無条件で認める上で、市場経済によって巨富を得る英雄になることを人々に期待する。その成功を目指すには「犯罪に手を染めるに似た」決意と自己誘導が必要なことを、例えばナポレオン・ヒルなどは説く。「くり返し嘘をついていると、いつかそれが自分でも本当のように思えてくる」¹⁵ように信念、暗示の力は大きく、成功を目指す方向に自己を誘導するのが成功への道だと説く。

ということは、一歩間違えれば市場経済によって巨富を得る英雄は暗殺者や連続殺人犯になる危険性ははらんでいる。まだ「2001.9.11テロ」が起こる前に、FBI心理捜査官レスラーは殺人犯中に「アラブの英雄になる」幻想を持つものがあることを指摘している。

あらゆる人や国家について「選択の主体性」を無条件で認める上で、実際に市場経済によって巨富を得る英雄が存在する中で、そうした資本主義の英雄たちを暗殺する「暗殺者=英雄」願望も現れる。そう考えればイスラム教原理主義、キリスト教原理主義といった宗教を考えな

15 ナポレオン・ヒル(田中忍訳),『成功哲学』(産業能率大学出版部,1977),p.55.

くても、社会的ないし社会心理学的考察だけで「テロとテロ対策」で動く現代社会の構図は読み取れる。

「アメリカの夢」とも呼ばれる成功をつかむためには人種、宗教の枠をこえた善意に満ちている必要がある。そのエネルギーが一転して悪意に変わる危険はある。しかし、逆にいえば、そういうリスクが予測できる程度にまで、強い意志を持って善意を貫く必要があることを、ハリウッド映画は繰り返し世界に訴えてきた。そうした「善意の主張」は言い換えれば「映画的ヒューマニズム」ということになる。

そのアメリカの「映画的ヒューマニズム」の淵源を、いささか奇矯な考えに見えるかもしれないと断った上で、ベーコンに求めたらどうかということを『データーベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する「その二」¹⁶で論考した。その要点は、映画は科学技術によって成立することと多民族や多くの階層を取り込むという二つの重要な要素があり、フランシス・ベーコンは単なる近代哲学の祖ということだけでなく「科学技術という思想」の祖でもあると考えられるからということであった。

「科学技術という思想」が「アメリカの英雄感覚」「善悪の振幅の激しさ」をさらに増幅することは、以下の例で身近に感じられるであろう。

青色発色ダイオードで名をはせた中村修二は、企業内で中村の研究打ち切りの方針があってもなお研究を続けた。その執着（研究への執着、結果がもたらす利益への執着を含め、アメリカ的英雄を求める姿勢とも見える）が日本の国家秩序を超えたのでアメリカに旅立つことになる。その「日本の司法は腐っている」という言葉を映画、演劇で説明すれば以下になる。

能、歌舞伎は通常の興行だけでは運営が困難である。国や地方公共団体への援助要請が日常的になる。スターになったメンバーを映画、テレビ・ドラマに出演させて金を稼いでも、それは流派や劇団への援助に使われる。（企業内研究者のもたらす利益が会社のものになることに酷似している。）日本の司法は（特に上級審になるほどに）、そうした活動を保護育成しても、アメリカ的巨額の報酬を是認する感覚は希薄である。

ベーコンは「科学者」であり、大法官という犯罪を裁く最高の地位を目指す人物であった。『データーベース：米国シェイクスピア研究学位論文』からシェイクスピア＝ベーコン説を検証する「その二」では、実証を重んじ、帰納法的な思考方法を唱え、法律の専門家で、法が想定する犯罪と犯罪心理に詳しいベーコンなら、一連のシェイクスピア演劇の「ホラー・SF感覚」の源に指定できるとも述べた。

またベーコンを、その科学技術への関心や科学技術理想郷としての「ニュー・アトランティ

16 富山大学人文学部紀要第45号（2006）。

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

ス」への想い、アメリカへの関心などを含めシェイクスピアが利用したのではなかろうかとも述べた。そのシェイクスピアがペーコンを利用した部分こそがアメリカの「映画的ヒューマニズム」と関わる部分だと思われるのである。

さて、ここでは以上を踏まえ、以下に現在の「テロとテロ対策」で動く世界の現状を踏まえた論考を行いたい。

米国学位論文で映画を扱ったものには技術論が多い。

ゼフィレリ、ブルックによる映画の比較分析ながら、前者は『ロミオとジュリエット』後者は『リア王』なのだから、手法の違いは作品による必然とも思える論考¹⁷がある。

黒澤明が『マクベス』を『蜘蛛の巣城』に翻案するとき、能をどのように使ったか、序破急などの技術論を展開する論考¹⁸がある。

この理由は「チャンスの平等」を掲げ、透明性があるルールで競い合う「アメリカの夢」を目指す方式にあると考えられる。つまり、テーマより手法にこだわり、一見神秘的に見える能さえもを技術論に分解して、誰もが「透明性があるルールで競い合う」リンクに載せようとしているのではなかろうか。その上で、先述の、各国の映画には敏感で、日本映画の特質もよくとらえている面を見せていることになる。「道」と「家」が結び付く明治以来の技術練磨志向があり、英雄を歓迎せず、「道」を究めた宗匠が尊重される感覚を、敏感に読み取っている。

そこから「リトル・ブッダ」など「アジアの精神」に関するハリウッド映画、もしくはその延長にある東洋論で、我々日本人がいささか違和感を覚える部分についての疑問が解けることがある。つまり、成功のための「透明性があるルールで競い合う」のが基本で、神秘的に見える「アジアの精神」に関することも、何とか神秘性を解明して、アジアに生まれなくても「その成果」を獲得できるものになりたいと考えていることが背景にあるのだ。

それは英雄ばかりを見てきた西欧から、技術をマスターしたアジア的な「宗匠」に接する違和感と新鮮さを同時に感じることであるのではないか。

そこからカップラーメンを創始することと、修行して禅の悟りを開くことが同列に論じられる日本側からの違和感にもなる。もちろん戦後まだそれほど経っていない時期の大阪の町で、屋台のラーメンに並ぶ長い列を見て、カップラーメンを思いつきカップヌードルにして世界のブランドにする努力は、戦国時代の携行食から始まり日本の中世、古代も視野に入る「インス

17 Biesinger, Kathy, *Style and signification in Shakespeare film: a study of the narrative realism of Franco Zeffirelli and the symbolism of Peter Brook*, (1990). 富山大学図書館請求番号930.28 |Sh| |Bie (以下、学術論文形式のデータベースとして米国シェイクスピア研究学位論文には図書館請求番号を付す。)

18 Lai, Ming Liang, *Akira Kurosawa's use of Noh in "The throne of blood", his film adaptation of William Shakespeare's "Macbeth,"* (1993). 932 |Sh| |Ma=La

タント食品」技術に遡る伝統に連ならないとはいえない。そうした技術にむかう日本人の執着は、刀鍛冶から鋳物の技術に連なり、神道の信仰、山岳信仰、修験者、そして日本流の禅の修業、へと連想は広がる。

しかし日本人の多くはカップヌードルを戦後の「お手軽文化」の一つと考え、そこに「精神性」を見出そうとは思わない。どうして英米人がカップヌードルの創始者安藤百福を高く評価する（英米サイトでMomofuku Andoを検索する方が日本語サイトで安藤百福を検索するより、はるかに多く詳細な記事が検索できる）のか疑問に思う。その一つの回答は「日本人の神秘性」を世界に開かれた技術にして企業的に成功したからということではなかろうか。英雄と「宗匠」の微妙な違いが浮かび、英米は「宗匠」を英雄として感知する事例にもなる。

そのくらいアメリカ人は成功のための「透明性があるルールで競い合う」ことを重視する。（成功すれば「宗匠」を英雄とみとめる。）そして「2001.9.11テロ」を、もしハリウッド映画として制作するとすれば、様々な形で「アメリカの夢」を見る人々の陰謀が渦巻く中で、旅客機ハイジャックとニューヨークの中心に位置するビルディングの破壊が企てられ、ヒーローがヒロインを救出し、間一髪でビルは崩れ、その中に野望の中心人物がいるというストーリーになることが多い。

「透明性があるルールで競い合う」中では、善意のかたまりになることが成功の秘訣であり、「映画のヒューマニズム」が最後には勝利するのだけれど、成功願望が一転して野望に変わることがある。そうした野望は打ち砕かねばならないというのが、「2001.9.11テロ」以後アメリカ軍がアフガニスタンについてイラクに侵攻しフセインを死刑にした筋書きになる。フセインは野望を抱く者なので叩かれたことになる。

「2001.9.11テロ」の発生と、その後のアメリカの対応は、ハリウッド映画のようであった。これに対し「2005.7.7.ロンドン同時多発テロ」の発生と、その後のイギリスの対応は、ウェストエンドの演劇のようであったと言えるかもしれない。

この英米の違いを考察するには、ミュージカルの映画化を考察すれば分かりやすい。ブロードウェイとウェストエンドの同時企画が多い昨今ながら、アメリカのブロードウェイ版は音楽・ダンスにすぐれ、イギリスのウェストエンド版は、演劇的側面にすぐれていると言われて久しい。このことは英米の特徴と深い関わりがある。英米の違いを、音楽・ダンスのアメリカ、演劇のイギリスと捉えるのである。

先述の『マクベス』と黒澤明の『蜘蛛の巣城』を技術論で比較考察したものは「能とシェイクスピア」を論じたものである。拙著に「能とシェイクスピアをどう結びつけるか」¹⁹という、「デ

19 「特定研究報告書——日本・東洋と西洋における文化構造と文化交流に関する総合的研究」、富山大学人文学部紀要第15号、(1989)、pp.285-325.

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」を作成する資金の基礎になった文部科学省科学研究費補助金を獲得した最初の報告書がある。この論考は百瀬泉の一連の「能とシェイクスピア」に関する業績を参考にしている、能に対する認識の基礎には、能勢朝次の「能楽源流考」があり、小西甚一（元筑波大学副学長、文化功労者）の『日本文藝史』²⁰に至る考察がある。その中の以下の文章を本稿は参照している。

・・・日本では、さまざまな専門の技能が「道」として精錬され、ひとつの道にすぐれた者は高い尊敬を受けたので、それぞれの道を受け継ぐ「家」では、たえずその専門における第一人者を出すべく努めた。・・・日本では、多様な分野において優秀な人材を保有していたから、十九世紀の後半に近代西洋の文化を急速に摂取し消化することができたものと考えられる²¹。

これらを統合し、音楽・ダンスと演劇を対立させ、技術論との関係を問う考察をするために、あるフラメンコに魅せられた女性の手記のようなものが、博士論文としてみとめられ、それが著書になったもの²²が参考になる。著者は東京大学哲学科を卒業後スペインに留学し、フラメンコにのめりこんでしまった女性で、組織、権力追及とは無縁の姿勢を取り、ひたすらフラメンコの心を追及した結果、有史以前から古代ローマを経てスペインにジプシーが「定着」するまでを文明史的に追求し、我が国にジプシーの痕跡はないか、といったことまで探求している。これは百瀬泉がシルクロードの東と西を見据え、新プラトン主義と真言密教との結び付きを論じたことを想起させ、西欧の視点をしっかり我が物とした上で、日本文学を古代から現代まで小西甚一が論じたことも想起させる。

(d) 多民族国家、植民地政策などに関わるもの

映画についての論考は多民族国家や植民地政策とも関る。例えば、昨今注目される韓国映画の隆盛を踏まえ、次の米国学位論文を考えてみよう。

戦前は坪内逍遙からの訳しかなく、戦後アメリカの影響でやっとシェイクスピア原文からの直接の韓国語訳が出たとする、韓国におけるシェイクスピア受容史についての論考²³がある。アジア系の移民も飲み込み、世界の文化を包含する米国の特徴が表れている。

20 全5巻(講談社, 1992).

21 小西甚一, 『日本文藝史 I』, (1985), p.110.

22 橋本ルシア, 「フラメンコ, この愛しきこころ—フラメンコの精髓」, (2004水曜社).

23 Kim, Jong-hwan, *Shakespeare in Korea: 1906-1989*, (1992). 930.28||Sh||Kim

ただし我々日本人にとって坪内逍遙からの訳しかなかった日本による朝鮮半島統治時代は韓国のシェイクスピア研究にとっての暗黒時代といった言い方をされると、今なお参考にすべきことが多い坪内逍遙の日本訳が、そんなに無駄なことだったのかと虚しい気持ちになり、これは政治的に歪められた論文の疑いがあると思ってしまう。

しかし、日本が韓国に与えた苦痛を本稿の立場で分析すれば、それは「宗匠」の国日本が植民地統治によって韓国が「アメリカ的英雄」の国になることを阻んだことになる。「宗匠」の国とは、「専門家細分方式で統一した見解なし」の国家秩序を持つともいえる。

現在「テロとテロ対策」で国際政治が動く段階になり、韓国の市場経済への参入と映画産業の発展を考える（つまり、韓国は「アメリカ的英雄」の国になりつつある）と、「坪内逍遙からの訳しかなかった日本統治下の韓国はシェイクスピア研究にとっての暗黒時代」ということが、必ずしも政治的に歪められた主張とも思えなくなってくる。

坪内逍遙について、小西甚一は「かれの文藝観には、戯作的な要素がさうとう濃厚であり、近代文藝論として、かなり不徹底なものだったといえよう」²⁴とする。以下に坪内とシェイクスピアの関係を端的に表した小西の文章を掲げる。

シェイクスピア劇には、近代を超えて人間そのものが洞察されている点まで、もし逍遙が演出できたら、この路線対立は解消されたはずだけれども、まだ「近代」の正体がわかりかねていた明治日本にそれを期待するのは、そもそも無理というものであろう。われわれは逍遙が新歌舞伎と新劇との両方に貴重な種を蒔いたことだけ高く評価するほかないらしい²⁵。

文中「路線対立」とあるのは、文藝協会内部で島村抱月のイプセン劇など近代劇志向と逍遙のシェイクスピア劇志向の路線対立をさす。

「戯作的な要素がさうとう濃厚」「イプセン劇に反感」となると歌舞伎志向がまだ残存していることになる。歌舞伎のヒーローは助六、義経といった「色町の英雄」「おちぶれた英雄」で行動の幅は狭い。善悪の振幅が激しい「アメリカ的英雄」とは違う。

つまり「チャンスの平等」を掲げ、透明性があるルールで競い合う「アメリカの夢」を目指す方式を設定する中で、経済的にも文化的にも軍事的にも「行動する人」として「座右の銘」を求め、「座右の銘の供給源」としての古典観でシェイクスピアを考えることは、坪内逍遙の日本語訳は想定していないと思う。またハリウッド映画に似た映画作りで、アメリカに追いつき追い越せを狙う韓国の映画作りの助けに、シェイクスピア研究がなるという事情は、と考え

24 小西甚一、『日本文学史』（講談社学術文庫）、(1993). p.194.

25 小西甚一、『日本文藝史V』、(1985), p.667.

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

れば、坪内逍遙の日本語訳では役立たず、英語の原文に触れ、米国で学位を取るようなシェイクスピア研究者が出る環境があって始めて・・・といったことは十分に想像がつく。その意味で日本統治時代が暗黒時代であったとの主張が、特に米国の大学に学位を請求する論文にあることは、そのまま米国学位論文の特徴として認識できる。

アメリカではキリスト教的チャリティー精神と、多文化主義が結び付く。

「ズールー族にトルストイがいるか、パプア人にブルーストがいるか」というペローの言葉が浮き彫りにする多文化主義であれば、文学における原始段階、発達段階、高度な文明社会の文学といった段階を「差別」として否定することにもなる。そして、ズールー族やパプア人の「文学」学習を西欧文学とともに大学の必須科目とする動きにつながり、これを拒否する動きが白人中心の「高度な文学」の価値を認める人々から出て、そこからアメリカの分裂に発展しかねないとの予想につながる。

多文化主義がアメリカで注目されるのは「めぐまれない人々に光を」というキリスト教的チャリティー精神で「めぐまれない文化にも光を」という精神土壌があって、しかも「卓越した知性を持つ哺乳動物」という「人間観」を重ね合わせれば「ズールー族やパプア人を差別するいわれはない」と感じるからではなかろうか。

アメリカのユダヤ人社会でのシェイクスピア受容を考察したもの²⁶は多民族国家米国の特徴そのものである。ただし、一見マイノリティーに見える米国内ユダヤ人が、ロビー活動で米政府に影響力を行使し、中東政策と関り、「テロとテロ対策」で動く国際情勢に関与するとすると、それだけではすまない問題になる。それについては後で詳述する。

インドで非宗教的植民地教育としてシェイクスピアなど英文学が採用され、白人と非白人の対峙が教育される意味を、第三世界の女性である論文の著者の視点から解析し、白人という自己と非白人という他者という概念をたて、ニュークリティシズム、フライからラカンを経て、ポスト・コロニアリズムに至るシャイクスピア批評を踏まえて論評した論文²⁷がある。

アイルランドの植民地化は、イングランド化したアングロ・アイリッシュの植民地化という複雑な面がある。そうした微妙な関係を、十六世紀の資料や『リチャード二世』をもとに解析した論文²⁸がある。

アフリカ系アメリカ人の女性として、シェイクスピアの立場を解析し、全体として有色人種

26 Berkowitz, Joel Baruch, *Shakespeare on the American Yiddish Stage*, (1995). MF||189||19

27 Gavaskar, Vandana S., *Post-Colonial Shakespeare: Fictions of Self, Fictions of Others*, (1995). MF||189||76

28 Glover, Laurie Carol, *Colonial Qualmas/Colonial Quelling: England and Ireland in the Sixteenth Century*, (1995). MF||189||67

への理解がシェイクスピアにあったとする論文²⁹がある。『ベニスの商人』のモロッコ王の台詞から、『夏の夜の夢』のハーミアとヘレナのちょっとした浅黒さをからかう台詞まで、引用例解析の詳細さが論文作者の敏感さを反映している。アフリカ系黒人作家の作品について、シェイクスピア分析成果による解析もする。シェイクスピアの『ソネット集』にも反映した差別意識の敏感さが主眼になっている。

こうしたマイノリティーの立場から、公式にはWASP（白人、アングロ・サクソン、プロテスタント）の文学であるシェイクスピアを研究して学位を請求することの意味は何であろうか。それと「チャンスの平等」を掲げ、透明性があるルールで競い合う「アメリカの夢」を目指す方式とは深い関係があると考えられる。

「2001.9.11テロ」に際してアメリカは全体主義国家のようにジョン・レノンの「イマジン」を禁歌にしてでもアフガニスタンとイラクに攻め込んだ。一方英国はロンドン地下鉄同時多発テロに際して、イスラム全体への敵意を抑える配慮を示しながら貧困層の技術者を誤認射殺した。

この英米の違いは、米国独立戦争の折、ジョージ・ワシントンの指揮の下、アメリカが一丸となり全体主義国家ようになって戦ったのに対し、ジョージ三世の軍隊派遣にロンドンでは反戦ビラが撒かれる「民主主義」が健在であったことを髣髴とさせる。

戦時のアメリカの「全体主義国家ぶり」が、そう強く非難されないのには理由があると思われる。上記のマイノリティーの立場からの論文を書いた、その「立場」の内訳はユダヤ人、第三世界の女性、有色人種一般、アイルランド人、アフリカ系アメリカ人（つまり奴隷としてアメリカに連れてこられた先祖を持つ黒人）等である。これらが「チャンスの平等」を掲げ、透明性があるルールで競い合う「アメリカの夢」を目指す方式の下に一丸となったようなものだからである。

一方の英国は、地上軍で大英帝国を建設し維持する立場から、ある程度階級による差別、人種による差別を温存しながら、それが極端にならないようにバランスを取りつつ統治し、反対党の発言を常に許す方式の「民主主義」国家であった。

この双方の立場がシェイクスピア作品には書き込まれている。

英国の立場についていえば、ベーコンは英国政府の中枢にあって異民族統治にも心をくいだいた。そのエッセイを下敷きにシェイクスピアは情熱的な「愛国心」を書き込んだ。それは主としてリチャード二世、ヘンリー六世、ジョン王といった「弱い王が国を思う」という形を取る。

アメリカの立場についていえば、ベーコンは職人の知恵と学問を融合させた科学技術の創始者

29 Birge, Amy Anastasia, 'Mislike me not for my complexion': Shakespearean Intertextuality in the Works of Nineteenth-Century African-American Woman, (1996).MF||194||5

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ベーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

であり、科学技術立国をめざす、まさに「チャンスの平等」を掲げ、透明性があるルールで競い合う「アメリカの夢」を目指す方式の創始者でもあった。シェイクスピアはそこに職人と連帯し、自身、ストラトフォードの田舎からロンドンに出て演劇で経済的にも成功した人物であった。

「ベーコンは英国政府の中枢にあって異民族統治にも心をくいだいた」点を説明すれば次のようになる。

ベーコンには「復讐について」「信教の統一について」というエッセイがある。「赦しは人間の栄光」とソロモンは言ったとして争う愚を説き、社会を連帯させる宗教の力を認めつつ統一と均質化の違いを指摘し、無知を退け聖戦反対を唱える。これからも伺えるように、当時の英国はカトリック教国に取り巻かれ、ヨーロッパ最初のプロテスタントの国で、ローマ教皇に反旗を翻して成立しながら、国の内外に争う勢力を抱えていた。エセックス事件はアイルランド問題という、現代にも尾をひく難しい問題の一端でもある。

こうした状況にある国の為政者の中心にあって、ベーコンは「多民族や多くの階層を調和させる」のが仕事であった。そこに心をくたく姿勢は真摯なものがある。エセックスを英雄視し過ぎないように工作することも、そこから来ていると思われる。

エセックス事件をめぐる、シェイクスピアとベーコン、庶民と体制側のインテリたちの微妙な駆け引きがそこにあるようだ。そういう中で、『ハムレット』は上演された。

ハムレットのモデルをエセックスとすれば、その上演が当局に対しエセックス処刑を「丁重にやれ」と注文をつけたことになる。単純に解釈すればシェイクスピアはエセックスを英雄視する側、ベーコンは逆にエセックスのイメージを引き下げる側に立ったことになる。

シェイクスピアは情熱的な、弱い王が国を思うという形の「愛国心」を書き込んだというのは、例えば忠臣蔵の四十七士のように江戸幕府に異を唱える立場でも、新撰組のように江戸幕府の側に立つ立場でも、自分は武士（騎士）であるという意識を持って集団に対する自己犠牲を感情的に応援することを指す。シェイクスピアの弱い王は、実際には何も出来ないのに「王である誇り」だけを持っている。

これは、あるいは小西甚一がいう「意地」と通底するものかもしれない。『意地』という著作（佐橋甚五郎「興津」「阿部一族」の合本の書名）がある鷗外を論じた後、小西は次のように言う。

・・・鷗外は、変革エネルギーとしての意地を、成功・失敗にかかわらず、あるべきものと認めていたにちがいない。だが、社会を良くするのは変革だけでなく、変革を拒否する意地もまた不可欠であった³⁰。

30 小西甚一、『日本文藝史V』, (1985), p.610.

ただしシェイクスピアの場合、ベーコンの影響もあり、演劇という常に広範な客の入り気を気にする立場からか、「為政者の味方」という意味の「愛国心」は注意深く避けている。

シェイクスピアは劇作家、詩人として人間の感情に興味があった。「多民族や多くの階層を調和させる」というより恋愛に関心を持ち「民族や階層の壁」に敏感であったと思う。

「多民族や多くの階層を取り込む」のはアメリカという国家そのものの特徴であった。それはシェイクスピア作品の特徴でもある。それはベーコンの「多民族や多くの階層を調和させる」仕事を間近で見ながら「多民族や多くの階層の壁」を、恋愛を通して切実に感じるシェイクスピアが、為政者の一人であるベーコンを参考にしつつ一種の感情的なアンチ・テーゼを提供するものだったからだと思う。エセックス事件を例にとれば、ベーコンは「処理」し、シェイクスピアは「戯曲化」した。ベーコンはエセックスの英雄意識と女王の寵愛を過信する自己陶酔的行動を批判し、シェイクスピアはその心情を理解する側に立って、さらに人間描写を普遍化した。シェイクスピアは常に感情的には「権力を持たない側」の味方という面がある。その「優しさ」に惹かれ多くのマイノリティーの立場に立つ人々がシェイクスピア研究で学位を請求する。

米国シェイクスピア研究博士論文は、植民地政策、戦前の日本による韓国支配、ユダヤ人差別、インド、アイルランド、アフリカでの民族差別問題と、キーワードだけ並べれば、まるで政治経済外交に関わる国際問題がテーマの論文かと見まがう。ただし、誤解しがちなのはマイノリティーの立場という、つい一国の為政者への抗議の声として、やがては為政者から福祉政策のようなものを引き出す動きかと思うことである。

シェイクスピアが描くキリスト教的チャリティー精神やアメリカで主流のキリスト教的チャリティー精神は福祉政策とは違う。

アメリカの建国の理念もそうではない。差別をする国家を相手に戦って、やがては、そのような国家を無くそうという動きに見える。科学技術の観点を取れば分かりやすい。多文化主義も内政不干渉も何のその、たやすく国境を越え、「アメリカニズム」は世界に浸透することを止めない。何より大量破壊兵器の管理の点でアメリカは「世界の警察官」であることを辞められない。同時に科学技術の浸透と歩調を合わせるようにジーンズとポップ・カルチャーが国境を越えて各国に浸透してゆく。科学技術は、貴族文化である自然哲学が起原の科学と、職人の知恵である技術の結合であって、フランシス・ベーコンが提唱し、英国では王立協会、王立研究所が、アメリカでは国全体が継承し、「思索」と「行動」を常に伴い、「行動」する側から「思索」する側への永久革命的な要素を持つ。常に若い知性が老人の知性を乗り越えてゆくシステムを必要とする。ジーンズとポップ・カルチャーはその象徴とも見える。

「チャンスの平等」を掲げ、透明性があるルールで競い合う「アメリカの夢」を目指す方式は、事実多国籍企業を巨大なものにし、国家の境を取り払ってゆく。ときにはイラクのように攻撃

「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」からシェイクスピア=ペーコン説を検証し、特に「テロ対策」との関連を探る

して一度国家を潰すことも厭わない。いとも簡単にイラク攻撃できる決断の背景には、そのようなアメリカの成り立ちがあると思われる。他の国ではもう少し国家の枠を尊重するので、全く他の理由がなくても、ただ簡単に国家を潰したり建国したりしたくないという理由でためらうのではなからうか。

コロニアリズム論やポスト・コロニアリズム論が盛んな時期があった。これらも抽象的な議論として受け止める分には日本人も参加できる。しかし、本当のところは国家の枠をさほど重要と感じないでイラクを簡単に攻撃し、潰し、再建させる感覚、多国籍企業が巨大な力を持つ環境で生まれた議論の仕方だと思われる。

グリーンブラットのコロニアリズム論によって植民地政策と国籍と言語の関係を論じるもの³¹がある。まさに移民の国アメリカならではの論考である。

ここでイスラエル建国と中東問題を考えると、聖書時代の理由でイスラエルを建国し、支援し、野望を抱いた理由でいとも簡単にイラクを潰してしまうアメリカの感覚は、国家をそれほど大切には考えず、「チャンスの平等」を掲げ、透明性があるルールで競い合う「アメリカの夢」を目指す方式を大切に考える考え方の反映ではなからうか。

ユダヤ人はその知力、財力で一大勢力を成した。透明性があるルールで競い合った結果として政府を動かす力を持った。しかもナチスのファシズムというアメリカが敵とする体制の犠牲者でもある。一方、アラビアの商人は一攫千金を狙って成功したり、石油で財を成したりする。しかしそれはアメリカから見て透明性があるルールで競い合った結果ではないと看做されがちである。ユダヤ人のロビー活動やアラビアの石油利権とアメリカの財閥の関係が、透明性があるルールで競い合うことかどうかは疑わしい。しかし司法取引が認められる国の透明性はモラルの問題ではなく「伝統という名の不透明感」が無ければ良いのではなからうか。

成功した後キリスト教的チャリティー精神で社会還元を行うのはビル・ゲイツが最近では著名な例である。それも本人の心情とは別に独占禁止法で提訴が続く状態の打開という面は否めない。またキリスト教的チャリティー精神といっても、アメリカの場合チャリティー団体と政財界の結び付きは強い。そこに「透明性」だけを見る訳にはゆかない。

オスマントルコのイメージが人種的なものではなく政治的、宗教的に西ヨーロッパを脅かすものであるということ、シェイクスピア、マーロウ作品から指摘したもの³²がある。日本人研究者にとって「当たり前」に近いことを熱心に指摘する論調から、逆に、オスマントルコの脅威さえ人種的なものに見るアメリカ人の人種問題へのトラウマが感じられる論考でもある。

31 Baker, David John, *Who talks of my nation?: colonialist representation in Shakespeare and Spenser*, (1991). 930.25||B17||Wh

32 Sallanti, Sancar, *The image of the Turks in early modern British drama*,(2003). CR||291||1

分類項目「(2) そうはいいつつも西ヨーロッパの文化の伝統を色濃く残している特徴(b) 英国以外の西欧各国文化と関連するもの」の中で次の指摘を行った。すなわちアメリカ人から見れば、戦前の日本人と戦後の日本人、荒っぽく分ければ「忠君愛国」の座右の銘で生きる日本人と「主権在民」の座右の銘で生きる日本人の二種類の日本人ないし日系人はリアルタイムで同時に存在するのだ。アメリカでは自己主張なしにはどんなグループも存在できない。二つのグループの自己主張は同時に存在し、必要があればどちらかを攻撃する必要がある存在になる。攻撃するか援助するか二者択一の世界なのだ。

人種差別に抗議しての黒人暴動が起きれば軍隊を派遣して鎮圧する。そうした国内問題の感覚でイラクに軍隊を派遣する面がアメリカにある。上記論文は、そうした感覚が不適當でオスマントルコの脅威は人種問題ではないと、米国学位論文にしては珍しく認識した論文ということになる。アメリカ全体の意識に対して是正を提言し受理されたということになる。つまり、アメリカ全体の意識は国内的な「暴動」の鎮圧と、オスマントルコの脅威への戦いを区別しにくい感覚だということを示している。

2. 終わりに

「米国シェイクスピア研究学位論文データベース」をめぐる一連の論考をこれで終える。本稿も、形式的には「1. はじめに」があつて本文の(c) (d) 後いきなり「2. 終わりに」があるという奇妙な構成になってしまった。それは一連の論考が分類項目によっているので、いちいち分類項目に章分けの番号をふることを途中でやめ、「終わりに」を付けない習慣になってしまったからである。

一連の論考を一言で言えば「米国シェイクスピア研究学位論文データベース」を科学技術社会論的な観点で分析したということになる。今後は、このことをはっきり意識して、新たな論考に取り組みたい。